

第10回「関西建築家新人賞」審査講評

審査員長 / 矢田 朝士 Asashi Yada

誰かを選ぶという事は必ず主観が入るものであるが、多角的な視点で評価したいと考え組織設計事務所の江副氏と出版等に携わるビライ氏に協力をお願いした。審査に先立ち二人をお願いした主要審査ポイントは、可能性と独創性である。但し、言葉だけが一人歩きせずに建築として成立している事、施主や社会に対して誠実な回答としての建築であることが前提としてある。

現地審査を終え、いざ新人賞の選出となると議論は止まず非常に困難なものとなった。表現手法や建築性に対する審査員の評価軸は大きく分かれ、個々の建物の評価から始まり、社会に対する建築のあり方や設計姿勢、そして特定の建築家を選出する意味に至まで侃々諤々の議論であった。最終的には構想とそこから実現された空間が一番重要であると考え、その点に注目した。

「右京の家」

比較的落ち着いた地域で区画割りに余裕があり、また住宅街でありながら近くに緑豊かな丘も望める立地である。広めの敷地と十分な隣家との距離などの予条件を最大限生かせるように建物と庭とを配置してゆったりとした空間をつくり、そして開口やスケール感、家具や植栽までも含めて総合的に、丁寧に計画されている。ただ、一番重要な俗世から隔絶されたリビング・ダイニングと庭との一体空間から廊下や階段が常に意識され、気を散らせてしまっていることが残念である。また、2階においては各個室が割り当てられるのみで、1階の空間構成との差の大きさが気になった。建築に対する特別な提案は見られなかったが、この家は幸せを感じさせてくれる良質な家であるというのが私の率直な感想である。

「メリヤスハウス」

郊外にある小さな工場跡のリノベーションであり、ハード・ソフト共に新たに加えるものは脇役となり、支えとなる計画である。施主の気持ち、建物の歴史的背景、施主家族のありよう、そして、施主と建築家との関係など全てがまとまり美しく清々しいストーリーが紡ぎ出されていた。建物の魅力が引き出され、施主とその家族がこれから歩む姿が想像された。それは既存建物やそれを取り巻く環境が持つ魅力の再発見であった。川村氏の無理強いのない誠実な姿勢は一つの価値ある建築家像を示している。

「奈良の家」

閑静な高台に建つ住宅。ここでは建築と地域との関わり方に優れた提案がなされていた。庭も含め、家とは街の一部である事を宣言している計画であった。そして建物は全体的にとっても良い質感でまとめあげられていたが、居室とデッキの繋がりについては、構想と具現化された空間との間にギャップが感じられた。外部の使われ方は非常に制限され、内部は内部で完結している為に住まい方に広がりがない。杉山氏には空間の持つ力をもっと引き出すことを望みたい。

「4n」

斜面地にある不整形な敷地。敷地環境の制約から逃れ、何かを獲得する為に建物を1層分浮かび上がらせていた。しかし残念ながら私の目には何を獲得したのかが写らなかった。構想で垣間見えた魅力が空間として建ち上がらず、現実を負けてしまっている。今津氏には、この住まいが家族の長い人生の時間に耐えうるだけの魅力を持ち続けるかを冷静に見つめ続け欲しいと思う。

「NTT西日本研修センター本館」

都市部に建つ企業の研修センターの中に、自然を感じる空間を随所に散りばめるという贅沢な構想を実現し、研修生にとって快適な空間を提供している。企業にとって難しくも望まれるこのような姿勢を示している施主及び設計者に敬意を表したいと思う。しかし、建築としては折角手の内に引き寄せた構想が情報の貼り付けに留まってしまっているのが残念でならなかった。外部スペース・休息スペース・研修室それぞれの繋がりや使い方も制限・固定されている中で空間の可能性はどれほど広がるのだろうか？そして畠山氏の目論む利用者の身体性・感受性の拡大に対して情報化された自然がどれほど有効であるのか疑問である。

「moon」

作家としてのコンセプトが明快に表現された作品である。阿曾氏の提案する「余白の空間」は濃密な生活空間の中に中性的な場をつくり出し、精神面での新しい公私の繋がり方を示してくれており、その点を評価した。外から家へ、部屋から部屋へ移動する度に気持ちを一旦ニュートラルにしてくれる。但し、この家では開口のあり方、外部社会との関わり方、快適性等まだまだ力を注ぐべき事柄はあり、阿曾氏にはこの賞を切っ掛けに益々建築に磨きをかけてくれることを期待している。

最後に、現地を訪れたこれらの建築に空間の力が感じられなかったことが残念であった。ただ一方で素直に質の高い建築が造られており、非常に嬉しく思った。これらの建築を体験する機会を与えて下さった施主の皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げたい。

審査員 / 江副 敏史 Satoshi Ezoe

審査の当日は朝から快晴の絶好の審査日和であった。現地審査の作品はいずれも質が高く、普段ではなかなか見せていただけない建物内部を見ることができ得るところが多い一日でした。新人賞というものはその建築家の「可能性」を選ぶものなのか、単に年齢の上限は定められているがその「作品の良し悪し」で選ぶものなのか、選ぶ審査員側の考え方でも左右されるだろう。

「右京の家」一言でいえば、上質な建築、でこんな家に住めれば幸せである。開放的であるが内部のプライバシーはしっかりと守られている。内外部とも過剰なデザインはなくよく抑制されている。あえて悪く言えばあまりにも優等生的な建築。でもだから何が悪いと言われそうである。

「メリヤスハウス」内部の木のトラス梁は重厚でレトロな落ち着いた空間の中にうまくモダンなキッチンが挿入されている。設計趣旨に語られていた「まるで子が、母をおぶるように」という言葉がぴったりと当てはまる建物であった。帰りがけに改めて外観をじっくり見ると、屋根や窓のプロポーションが実に洗練されていた。壊される運命だった建築の良さを引き出し、再発見させる建築だった。

「奈良の家」各所のディテールがとてもよくできている。建物正面南庭に面したキッチンが心地よく、住み方の新しい提案になっていた。クライアントが趣味で作ったという素晴らしい家具ともうまくマッチングしている。2階のギャラリと書斎がどのように使うのだろうかとか、東側道路に面した塀の高さについては別の考え方もあるかもしれない。

「4n」中央に階段を配したシンプルで明快な平面計画。建物を持ち上げたピロティ部分が心地よく今後色々な利用の楽しみが期待できる。ただせっかく1階をピロティにして建物全体を持ち上げたにもかかわらず、眺望の良さを生かし切っていない閉塞感が感じられた。突き当りにはやはり窓が欲しい。

「NTT 西日本研修センタ本館」環境面にしっかりと正面から取り組み結果を出している。研修室の間にちりばめられた吹き抜け空間は魅力的で、図面上小さいかと思ったが最下階まで効果的に光を導いている。ワイヤで斜めに這わしている植栽も新しい発見であった。ただ、東面の張り出した押出成形セメント板のルーバはいかにも目隠しっぽいと感じられた。

「Moon」コンセプトは明快である。が、限られた面積の中でテーマである余白が本当に必要であったのか。また階段など納まりに気になるところがあったが、扉をなくしカーテンで仕切るなどの工夫は楽しい。他の作品が成熟している中、ファンタジーなところで粗削りであるが建築に夢を感じさせるところが最も「新人賞」にふさわしいともいえる。

審査員 / エルウィン・ビライ Erwin Viray

建築の賞の審査は建築という職能について様々な事柄を考える機会となります。我々は建築をどのように考え、感じているのか、環境についてどう思っているのか、建築とは何か、建築とはどのように造るのか、環境とどのように向き合うのか、などを問い掛ける機会でもあります。

今回の新人賞の現地審査に選ばれた作品は全て優れた建築でした。建築家の皆様は真剣に建築を考案していました。どのように建築を造るのかは様々な可能性を見ることが出来ます。敷地の背景、関係性も考える切っ掛けに成っています。又、使う方々の行動や気持ちも大きな影響を与えています。

新人賞を決めるには、どのような条件が必要かを審査員全員で真面目に議論しました。「何らかの…プラスα」何かの価値、方法、見え方を感じさせるもの。そして、どのような建築か、どのように造るのか、どのように楽しめるのかなどが議題になりました。建築の造られ方、建築言語の組立て方、構成の仕方などについて問い掛けました。素材をどのように使うのか、どのように組立て、どのような効果、雰囲気を作っているのか。建築の様々な要素はどのような環境を出現させているのか。古い手法や新しい手法も考察しているのか。今回の審査は改めて建築について問い掛け、考える機会となり、とても有意義な時間となりました。

最終的には、全体に「何らかの…プラスα」を感じさせた作品を選ぶ事に決めました。阿曾さんの作品は、見え方、感じ方、感覚・感性、造り方、住まい方などに「何か…プラス」となるものを感じさせるものでした。又それらを感じさせてくれた今回の作品は、建築という芸術、技術、職能について未来に進む予感を与えてくれました。それは建築の楽しさを発見させるきっかけでした。今回の新人賞は喜びを感じさせる作品です。